

[成果情報名] ガーベラの生け水の白濁抑制技術並びに花茎が腐りにくい輸送方法

[要 約] ガーベラは、初夏から秋に生けた水が白濁し花茎が腐りやすいが、抗菌剤を主成分とする後処理剤を利用すると、白濁が抑制され、日持ちが向上する。また、花茎基部が残っていれば腐りにくいため、乾式輸送では基部を残した状態で行う。

[キーワード] ガーベラ、抗菌剤、日持ち

[担 当] 静岡農林技研・花き科

[連絡先] 0538-36-1555、agrikaki@pref.shizuoka.lg.jp

[区 分] 関東東海北陸農業・花き

[分類] 技術・普及

---

[背景・ねらい]

静岡県は、全国一のガーベラの生産県である。消費者は花持ちが長い花を求めているが、初夏から秋にかけ、生けた水が白濁し、花茎が腐りやすく、日持ちが短くなる。そこで、生けた水の白濁を抑制する方法並びに花茎の腐りが発生しにくい輸送方法を開発する。

[成果の内容・特徴]

- 1 ガーベラは雑菌が繁殖し白濁した水に生けると、花茎が腐り、曲がりが多発するが、花茎基部が残っていれば、腐りが発生しにくい(表 1)。
- 2 ガーベラを生けた水の白濁程度と日持ち日数は、品種により異なり、生けた水が白濁しにくい品種では日持ちが長くなり、白濁しやすい品種では短くなる(図 1)。
- 3 生けた水の白濁程度は、時期により異なり、初夏から秋には白濁しやすくなるが、低温期は白濁しにくい(図 2)。
- 4 生けた水が白濁しやすい品種、時期に、抗菌剤(レジェンドMK 0.25ml/ℓ)を主成分とする後処理剤を利用すると、生けた水の白濁が抑制され、日持ちが向上する(図 3)。
- 5 白濁しやすい品種、時期は、抗菌剤を主成分とする品質保持剤を利用し湿式輸送を行う。乾式輸送の場合は花茎基部を残した状態とし、やむを得ず切り戻す場合は最小限とし、抗菌剤により前処理を行う。

[成果の活用面・留意点]

- 1 気温 23℃、相対湿度 70%、12 時間日長条件下での試験結果である。
- 2 生けた水の白濁は、このほか栽培条件、気象条件、前処理方法等の影響を受ける。
- 3 抗菌剤は、レジェンドMK以外のものでも効果は期待されるが、使用する場合は事前に効果を確認する。

[具体的データ]

表1 花茎の状態及び白濁した水とガーベラが観賞限界となった症状との関係(品種‘ミノウ’)

花茎の状態 <sup>2</sup>	水	観賞限界となった症状(本)				花茎の腐り(本)
		花茎の曲がり	花弁の萎れ	花首の折れ	花弁の脱落	
切り戻し	蒸留水	2	3	3	2	0
	白濁水 <sup>Y)</sup>	9	1			10
基部残し	蒸留水		10			0
	白濁水	1	9			0
症状別の合計(本)		12	23	3	2	
症状別の日持ち日数(日)		6.4	11.5	17.3	17.5	

Z)切り戻し区は40cm、基部残し区は収穫後未調整とした。

Y)ガーベラを生け続け白濁した水。生菌数はlog8.0cfu/mlであった。

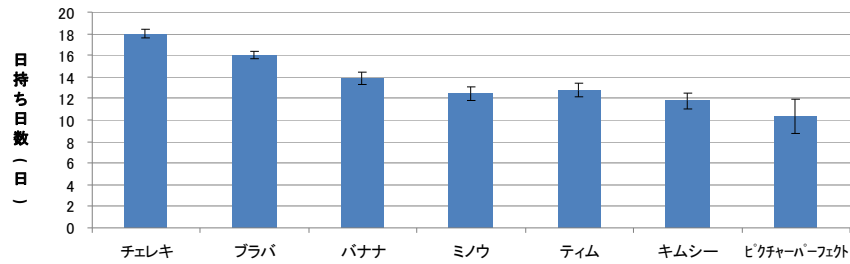


図1 初夏におけるガーベラの品種別日持ち日数

約23℃、RH約70%、12時間日長条件下で、蒸留水100ml入り試験管に1本生けた日持ち日数。値は9本の平均値±標準誤差。2009年6月。

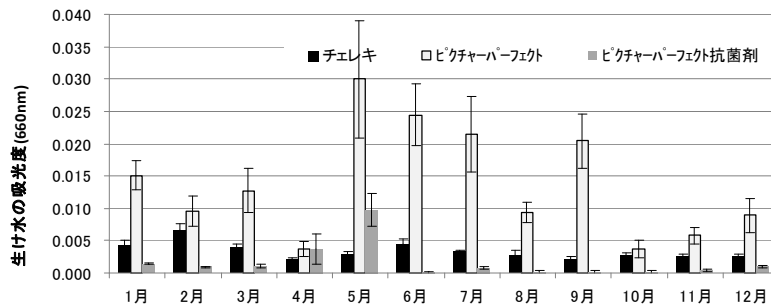


図2 時期別品種別の生け水の白濁程度

約23℃、RH約70%12時間日長条件下で、蒸留水もしくは抗菌剤(レジェンドMK)100ml入りの試験管に1本ずつ生け、1週間後の生け水の吸光度を調査。値は9本の平均値±標準誤差。

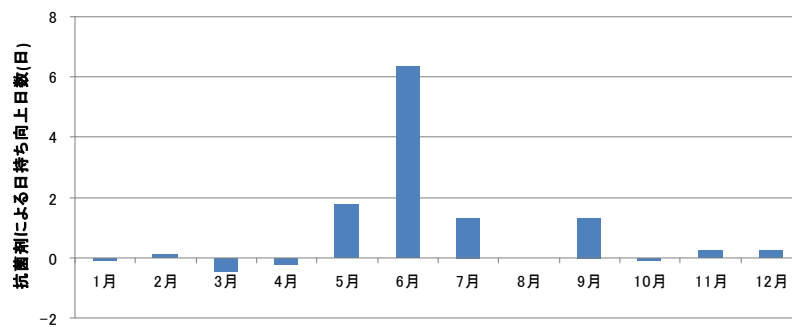


図3 時期別の抗菌剤利用による日持ち向上日数

品種ビクチャーパーフェクト。約23℃、RH約70%、12時間日長条件下で、生け水として蒸留水と抗菌剤(レジェンドMK)を利用した場合の平均日持ち日数の差(抗菌剤-蒸留水)。

[その他]

研究課題名：ガーベラ・バラの日持ち性向上技術の開発

予算区分：国委(2010～2012)、県単(2008～2009)

研究期間：2008～2012年度

研究担当者：外岡慎、本間義之、貫井秀樹、石田圭祐